

孤独と空腹と非行

山口県防府市立佐波中学校 2年 弦田 悠平



「子どもたちが非行にはしる原因は、一、孤独、二、空腹、三、環境じゃ」これは、夏休みに訪問し、お話を聞かせてもらった「ぼっちゃん」という人の言葉だ。僕は「ぼっちゃん」という人をよく知らなかったが、母親が時々会いに行ったり、お米を送ったりしていることは知っていた。普段から母親は、貧困状態の家庭に食料を届けたり、困っている人がいれば一緒に市役所や病院に行って相談をしたりしている。なので、そのような関係の人だろうと思っていた。しかし、実際に会った「ぼっちゃん」は、もっととてもすごい90歳の女性だった。

「ぼっちゃん」とみんなに呼ばれているが、名前は中本忠子さん、広島県広島市でNPO法人「食べて語ろう会」の代表をしている。ここにはたくさんの子どもや大人が集まり、一緒に食事をしている。僕たちが行った日もお昼を過ぎると小学生や中学生の子どもたちがご飯を食べにやってきた。夏休みで学校の給食がないからだ。僕と両親もぼっちゃんや、やってきた子どもと一緒にご飯を食べた。ご飯は牛筋と玉ねぎのカレーとサラダ、チリコンカンだった。土曜日や日曜日はカレーなのだそうだ。外国人の子どももいた。一緒にご飯の準備をしていた人は、最近は外国の子どもも来るから、宗教の関係でお肉には気を付けていると話していた。一緒にご飯を食べた外国人の男の子は辛いのが好きだと話していた。こうやって、ぼっちゃんたちは、40年以上、毎日休むことなく子どもたちにご飯を食べさせている。

どうしてぼっちゃんが子どもたちにご飯を食べさせているのかというと、「みんな腹が減ったら悪いことをする」からだ。ご飯も食べられず、ずっとお腹がすいていたら、どうしても食べ物が欲しくて万引きをしたり、悪いことをしてお金を得ようとしたりする。でも、ご飯をいっぱい食べられれば悪いことをしない。そして、安心して生活することが出来る。そうなれば、もし悪いことをしている人でも、悪いことを辞めて、もう一度立ち直ることが出来る。食べることの心配をしないといけないなんて、いつも、朝起きれば朝ごはん、学校で給食、学校から帰れば夕ご飯があることが当たり前だと思っていたので、はじめは想像することも難しかった。そんな僕に、ぼっちゃんはいろいろな子どもたちの話をしてくれた。ここに来ている子どもたちはみんな、家で十分にご飯を食べることができない子どもたちだ。学校にも行っていない子どもも多い。悪いことをして少年院などに入っていた子どももいる。最近は、詐欺や大麻と言った薬に手を出す子どもが多くいるそうだ。僕には想像もできない世界

だが、これが僕の知らない「もう一つの現実」だった。

ここに来ることが出来る子どもたちは、ばっちゃんやスタッフの人たちとご飯を食べながらいろいろな話をする。家のこと、学校のこと、友だちのこと、仕事のこと、そして「悪さをしている」こと。ばっちゃんたちは、それを聞きながら、一緒に笑ったり、悲しんだり、時々ひどく叱ったり。本当だったら、自分の家で家族とするような関わりをここでしている。箸の持ち方を学ぶ子も多いそうだ。

どうして、ここに来る子どもたちが、こんなに苦しまなくてはいけないのか不思議だった。背景には「家庭の問題」というのがあるそうだ。親が犯罪者だったり、薬物中毒だったりして、満足に毎日の生活が送れない家庭が多く、ひどい時には犯罪に子どもを巻き込むこともあるそうだ。ばっちゃんたちもその子どもたちの親に話をしに行くが、全然聞かんし、ひどいときは攻撃されることもあるそうだ。そんな怖い思いまでして、どうしてやるのだろうかと思ったが、ばっちゃんは「わしゃあ、怖くない。子どもに罪はないけんのう」と言って笑っていた。人のためにここまでできるなんて、本当にすごい人だと思った。

子どもたちの非行や犯罪はとても深刻な問題だと思う。携帯電話やタブレットを持つようになってから、自分たちが犯罪に巻き込まれる危険はとても高くなった。しかし、それ以前に、生きるために悪いことをしなくてはいけなかった子どもたちも多くいることを知った。僕たちは携帯電話やタブレットから目を上げ、もっと現実の自分のまわりの人のことを知り、心を配ることが大事なのではないかと思った。そして、困っていることに寄り添い、生活を支えることで孤独を減らし、悪いことをしなくても自分の人生を生きることが出来る社会をつくるのが大切だと考えさせられた。

僕は、また母親がばっちゃんの所に行くことがあれば、一緒について行って、自分に出来ることが何か、真剣に考えてみようと思う。